



OUIK Newsletter

2019年秋号



寺島蔵人邸

目次

地域での活動 **2ページ**

- SDGs ダイアログシリーズ総括シンポジウム「地域の未来をSDGsでカタチにしよう」
- 金沢市指定文化財「千田家庭園」清掃ワークショップ開催
- IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGsカフェ」スタート
- 能登 GIAHS 教育を考えるワークショップ開催
- 国連大学ブース in MISIA の里山ミュージアム
- 「SDGs 三井のごっつお Project」始動
- シンポジウム「金沢の庭園がつながる人と自然」
- GIAHS アクションプラン策定ワークショップ
- LGBT と教育ダイアログ

国際的な活動 **10ページ**

- 「都市の現実と都市の自然」リーディングワークショップ
- 第4回SDGs国連ハイレベル政治フォーラム (HLPF) に参加
- 第6回東アジア農業遺産学会 (ERAHS) に参加

新しいスタッフの紹介 **11ページ**

インターン生の紹介 **12ページ**

出版物の紹介 **12ページ**

SDGs ダイアログシリーズ総括シンポジウム

「地域の未来を SDGs でカタチにしよう」

日時：2019/3/23

場所：金沢市文化ホール

2018年6月4日のキックオフ円卓会議でスタートしたSDGs ダイアログシリーズの締めくくりとなったこの回は「地域発のSDGsの可能性について」と題し、今までの対話（ダイアログ）で見えてきたモノや課題を皆さんと共有して、今後どのようにSDGsを進められるかということを中心にセッション1では自治体の視点から、セッション2では異なる主体のパートナーシップによる推進について、パネルディスカッション形式で議論を深めました。

総括シンポジウムに先立ち、その成果について山野之義金沢市長から発表がありました。金沢市では「金沢独自の目標を設定する」「その目標を達成すべく実行計画を策定する」「そしてそのことを多くの市民の皆さんに知ってもらう」という3つを進めていく上で、5つの方向性を導き出しました。

- 金沢の個性（自然、歴史、文化）を大切にしながら新しいことにチャレンジしてきた先輩。我々も新しいことに挑戦し、新しい魅力を付け加えて後輩たちに繋げていかなければいけない。
- これからの都市の成長とは拡大・膨張ではなく、与えられた環境を大切にして、資源循環型社会を作って次の世代へと伝えていかなければならない。そして世の中をつくっていくのは子供や孫たち。
- 常に子供や孫たちを意識して街をつくっていくかなければならない。
- ハンディキャップを背負った方、高齢者、若者、女性、男性、全ての方が力を発揮できる環境を意識しながら施策をつくっていく。
- 先人がつくってくれたものを大切にしながら、新しいことに挑戦していく。それが個人の資質で終わるのではなく、仕組みとしてつくり、持続発展型の社会にする。

「2030年がどんな世の中になるべきか？」をイメージしていくことが大切であり、金沢SDGsは「IMAGINE KANAZAWA 2030」



と名付けて2019年4月より活動開始すると発表し、「3者だけでなく、多くの市民を巻き込んでいくことで多くの皆さんとともに持続可能な街・金沢をつくってきたい。そのために精一杯努力することをここで宣言します」と、山野市長は結びました。

セッション1『地域でのSDGs推進における自治体の役割とは』では、ファシリテーターの高木超氏より、「SDGsをきっかけに自治体は何が変わるのか？」について、話題提供がありました。

既存の政策でいくと持続可能ではない。SDGs視点の政策が持続可能にする。変革的な工夫が求められ、現在の当たり前前の社会構造をどのように変えていくかが重要であるといった意見がでました。



金沢市からは企画調整課長の高桑宏之（たかくひろゆき）氏、政府のSDGs未来都市に選定された自治体からは、珠洲市企

画財政課長の横川祐志氏、白山市企画振興部次長の横川祐志氏、長野県職員で信州イノベーションプロジェクトSHIP共同代表の倉根明德氏の3名に登壇していただき、議論を深めました。倉根氏曰く、SDGsという世界標準の視点が整備されることで縦割りに横串を刺しやすくなり、職員の意識改革にもつながったそうです。「多様性を受け入れるにはどうすればいいか？SDGsの進捗をどう評価するか？」といった課題も多いが、そういったことを対話で決めていく、そのプロセスが大事なのではないかという意見も出ました。

SDGsの特徴！バックカスティングとインターリンケージという考え方とは…？

バックカスティングとは、未来の理想の姿を規定し、そこから現在、何をすればいいか、もう一度考え直して政策を積み上げていくもの。そして、インターリンケージとは、縦割りを打破して複数の異なる部署が協力することで相乗効果を生み出すもの。過去は現在に影響している。未来から現在を考えなおすことで、未来もまた、現在に影響している。SDGsは未来を考えることで自治体の今の行動を変えていく。

セッション2『SDGsパートナーシップのデザインとは』では株式会社エンパブリック代表取締役の広石拓司氏をファシリテーターに迎え、一般社団法人コード・フォー・カナザワ（CfK）代表理事の福島健一郎氏、EMPOWER Projectのメンバーで金沢大学大学院生の蝦名昂大（えびなこうた）氏、石川県立大学准教授の上野祐介氏、そして国連大学IAS-OUIK事務局長の永井三岐子がパートナーシップのあり方について議論を深めました。

まずは、広石氏から、SDGsを考える上でのパートナーシップの重要性と、そのあり方について話題提供がありました。SDGsのテーマは私たちの世界を次のバージョンに変えましょうというもの。今の問題は様々な要素

が絡みあい、何が一番問題なのかを一つには同定できない状況であり、様々な分野とのパートナーシップが重要となる。そのため、パートナーシップ自体も次世代バージョンに変えて、みんなでレベルアップしていかないと問題は解決できない。また、SDGs は企業が熱心に行っているように、経済という側面も重要であり、また新しいテクノロジーも必要ではないかと述べました。

続いて、それぞれのパネリストから自身の活動について説明がありました。福島氏からは ICT から SDGs の課題解決を目指す「Civic Tech (シビックテック)」の取り組み、蝦名氏が所属する EMPOWER Project からは「協力者カミングアウト」という活動の紹介、上野氏からは、昨年4つの大学の研究者で設立した「北陸グリーンインフラ研究会」の紹介がありました。OUIK の永井はダイアログシリーズを通し、「人と人との繋がりを広げることができ、そして、パートナーシップを行ったことで、常に他の方の視点を学ぶことができた」と述べました。



広石氏は、「SDGs を使うことでいろいろな人が関われる。そして自分には関係ないと思っていた分野の人たちも集まって、持続可能な社会って何かを話あえるきっかけにもなる。また SDGs により、『こういうことが正しいのではないかな?』といった意見も出しやすくなって、それが実際に実現していくのが 2030 年になればとってもいいのではないかな。そこに皆さんが持っている技術だとか、助けたい心だとか、学問だとか、そういったものを持ち寄れば地域を変えられる。」と金沢、石川県発の SDGs への期待を込め、セッション 2 を締めくくりました。

閉会のあいさつでは国連大学 IAS-OUIK 所長の渡辺綱男が「いろいろな意見があるが、違いを乗り越え



て、お互いが学び合って前に進んでいく。そういう柔らかなパートナーシップを育てていくことが、これからはとっても大事なんだなと感じた。」と述べました。

金沢市指定文化財「千田家庭園」清掃ワークショップ開催

日時：2019/3/31

場所：千田家庭園（非公開）

庭園の維持は手のかかる作業です。普段からの木々の手入れ、草むしりなどに加え、特にこの千田家庭園のように大きな池があり、用水から水を引いているタイプの庭園では、定期的な池の清掃も必要となってきます。これがとても大変な力仕事なのですが、前回の清掃ワークショップから半年が経ち、また池の底に泥が溜まってきました。



今回のワークショップでは、地域住民、学生、自治体職員、外国人観光客の方々、約 15 名の方々に参加頂き、水を抜いた状態の池の中に入り、底に溜まった泥を除去する作業を行いました。

清掃が終わった後は家の中でお茶を頂き、所有者の千田氏と石野氏から、この庭園の歴史や造りについて学びました。この庭園は千田登文旧加賀藩士が 1984 年（明治 27 年）に作庭した池泉回遊式の庭園で、いたるところに今の時代では中々見られない職人技が施されているそうです。参加者も普段なかなか聞けない話に興味深く聞き入っている様子でした。

このような清掃ボランティア活動は元々、金沢市の景観政策課の方々を中心に行われていたようです。2017 年から OUIK のファン研究



員も活動に加わり、この活動を「エコツーリズム」へ発展させるべく、清掃後に庭園の歴史や管理について学ぶワークショップやお茶会を組み込み、体験型プログラムとしての定着を進めて来ました。重労働が分散でき、所有者にもメリットがある新しい庭園の管理システムとして更なる活用が期待されています。

IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGs カフェ」 スタート

2019年4月から「SDGs カフェ」を開催しています。IMAGINE KANAZAWA 2030 プロジェクトの一環で、金沢の未来を決めるのは市民であり、いろいろな人に参加していただき、2030年の金沢を想像してもらう（IMAGINEしてもらう）のが狙いです。

カフェということで、飲み物やお菓子をつまみながら、緩やかな雰囲気の中、誰でも気軽に参加でき、意見を交わせるリアルコミュニケーションの場です。

2019年9月現在までに既に第5回まで開催されており、様々なトピックについて登壇者、そして参加者の皆様と金沢の未来をイメージしてきました。

第1回は、未来の教育を株式会社ガクトラボの仁志出憲聖氏がイメージしました。未来の教育は知識を吸収することよりも、世界をどのように理解するかという質的なものになっていくとして、金沢が持つ歴史、文化、哲学を活かした次世代型ワークショップアカデミーを提案しました。

それに対する世界の事例として能登町在住の Paul Muthers 氏が生徒と先生が対等に学校のルールを作っていくデモクラティックスクールに



ついて紹介しました。ご自身もイギリスの Summer Hill School の卒業生ということで、日本ではあまり例のない、生徒が校則や授業の進め方を決めていく学校での、民主的なプロセスや子供の学びについて話しました。参加者からは日本の教育現場との大きな違いに終了時間を過ぎても質問がやみませんでした。

お二人のお話の共通点として、大人が子供に知識を与えるのではなく、子供が世界を切り開いていくためのサポートをするという視点が印象的でした。



第2回では「Civic Tech と誰も取り残さない情報アクセス」をテーマに2030年の金沢をIMAGINEする人として認定NPO法人フローレンスの須田麻佑子氏に登壇していただき、「テクノロジー（IT）の恩恵をすべての市民が受けられる」、「テクノロジーからアウトリーチ（出前・出張サービス）の仕組みづくりができる」、「社会課題解決のための資源を供給しあ

う」、そんな2030年の様子を、ご自身が取り組まれている子育ての現場などを例にとって紹介していただきました。

「このIMAGINEを実現するためにできることは？」その答えをいろいろと持っているエキスパートの福島健一郎氏（CfK 代表）と、堤敦朗氏（金沢大学准教授、EMPOWER Project KAN-AZAWA 主宰）からもプレゼンテーションを行っていただきました。

全ての人に情報を届けるのは簡単ではありません。「情報を欲している人がいかにそこに簡単にアクセスできるのか？その配慮をしなければ情報を出す価値はほとんどない」と、堤氏は言います。誰も取り残さないためには、誰もがその情報にアクセスできるようにしなければいけないということです。

今後、これを発展させるためには資金をみんなで出し合っても、情報をわかりやすく提供できるツールを作っていくことが必要なのかも、といった意見も出ました。他にも

テクノロジー自体は特別なものではなくりつつあるが、様々な社会問題を自分ごととして考えようとする人はまだ少ないとか、地方自治体のオープンデータ化はなぜ進まないのかなど、今回のテーマに関連することの質疑応答や意見交換が、積極的に行われました。



第3回では、「今、求められる教育」をテーマに、藤岡慎二氏（北陸大学経済経営学部教授、地域連携センター長）をお招きし、学校教育を問い直すドキュメンタリー映画『Most Likely to Succeed』を鑑賞し、会場の皆さんと対話しました。

この映画は未来型教育を研究・実践しているアメリカの高校“High Tech High”の21世紀型の授業スタイルの実際をとらえたドキュメンタリー映画です。

学んだことはテストではなく文化祭などで評価され、詰め込み式の受験偏重型教育とは違い、学生が主体的に深く学び、失敗や成功を通じて人間的にも成長することが狙いとされています。

そもそも今の世の中の教育のシステムは産業革命後の大量生産を推し進めている時代にできたもの。GDPが伸びれば、国民所得も伸びた20世紀にはマッチしたものでしたが、1990年代後半からの急速な技術の進歩により、多くの仕事が奪われ、もはや大学を卒業したら安定



した職に就けるという時代ではなくなりました。この先、「より創造力の高い仕事だけが生き残っていく時代となる」、そう考えると、今の教育システムで十分なのか？という疑問や不安が生じてきます。

藤岡氏曰く、この映画は観て終わりではなく、当事者である学生やその親、教師をはじめ、様々な立場の人が意見を交えあうことが重要だ



そうです。映画を観た後のワークショップではグループに分かれ、自分たちの地域、そして日本の教育システムについて話し合いました。子どもの個性を伸ばしながらも、礼儀正しさや日本人らしさが残されたシステムがこれからの時代は必要なのでは？といった意見がでたようです。

第4回目のSDGsカフェは実は第3回との連動企画でした。「2030の担い手育成」をテーマに2030年の金沢を金沢大学附属高等学校校長の山本吉次先生にIMAGINEしていただき、シンガポールの日本人学校の校長を務めた経験を持つ池端弘久氏、そして学生と企業、子供たちと地域社会を結びつける活動などを行う仁志出憲聖氏にアイデアを出して頂きました。

附属高校は、2014年から文科省のSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）指定校となりました。（5年間の期間限定のため、2019年3月で終了）



国際社会の中で、地球生態系の中で、サステナブルに能力を活かして生きていける人間を作るために、SGHによる地球サイズの教育活動を行ってきたそうです。国内外の学校との交流や、北陸の機関や企業の指導などを受けるなど、オープンな学校へと変化し、外から中に入ってくるだけではなく、中から外へ、留学などで海外へ出ていく生徒も増えたそうです。また、これから実施されていく「新学習指導要領」でも「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されていくそうです。

その後、「大人も子供も一緒に問題意識を共有すべき」という池端氏からはシンガポール日本人学校で行っていることや、海外から見てわかった日本の教育の良い点や足りないことなどを紹介してくださいました。また、仁志出氏からは全国で唯一、「学生のまち推進条例」がある金沢で、長期実践型のインターンシップ（ガレナ）での学生支援の実績の紹介があり、若い人たちの

意見も主体としてしっかり取り入れつつ、多様性のある教育の仕組みになっていくような場を、ここの皆さんとディスカッションしていきながら作っていきたいと述べました。



第5回は「2030年 こんな会社があったら働きたい！ -社会に求められる企業経営の姿とは-」と題し、金沢イクボス企業同盟の「金沢版働き方改革普及プロジェクト サマーセミナー2019」と合同で開催しました。

現役大学生の中西辰慶（たつよし）氏（東京都台東区出身の金沢大学2年生）と戸上玲央氏（金沢市出身の明治大学4年生）という金沢に縁がある2人に2030年の自身の働いている姿をイメージして頂きました。



「コスパが面白い仕事したい！」と言う中西氏。楽をしたいのではなく、結果として幸福度が高く、学んだり、成長を感じられることが

「コスパの良さ」とのこと。プライベートの充実も重要ですが、趣味だけでなく、家族との時間や地域社会への貢献を通じて自己表現することも大切に思っているそうです。

一方、「地域の稼ぐ力向上支援をしたい」と言う戸上氏。これからの中核都市の発展を担っていくモデルケースを金沢や石川県で作っていくべき。そのためには魅力的な新事業の創出やそれを軌道に乗せること、つまり「稼ぐ力」を作ることが重要であり、それがシステムとして昇華されれば東京への若者の流出を防げるのでは、と語りかけました。そのための人間力、実務力をこの先10年で身に付ける必要があるといいます。

次に働きがいのある会社ランキングで6年連続ランクインしているサイボウズ株式会社に社長室フェローをされている野水克也氏（金沢出身）からお話を聞きました。「給料が低くても人気のある会社になるには？」という問いに、市内の企業から参加された方々は興味深々。サイボウズでは「100人いたら100通りの働き方がある」「一生の間に自分で働き方を決めながら、キャリアプランを作れます」という風に



したところ、就職希望者が押し寄せてくるようになったそうです。さらに「多くの学生たちは、自分でスキルを身に付けたいと思っています。そのための手段をどれだけ認めてもらえるのか？それだけの新しいビジネスの方向をやってくれるかどうか働きたい基準の一番。これをできない会社が多すぎるということになります」と語りました。

その後のトークセッションでは「社会に求められる企業経営の姿とは？」という質問に対し、近江商人の三方よし「売り手よし、買い手よし、世間よし」と同じ。自分、お客さん、社会がいいということ。金沢や石川のためになって、お客さんのためになって、自分のためにもなるということ。それを延々と続けていけば、それは社会に求められる企業となる、と締めくくりました。



能登 GIAHS 教育を考えるワークショップ開催

日時：2019/6/1

場所：石川県健康の森

子どもたちが能登のお祭りの「ごちそう（ごっつお）」の準備を通じて、自然の恵みと地域の知恵を学べるように、OUIK では地域の方々と協力し 2018 年に「ごっつおをつくろう」という絵本教材を発行しました。

今回はこの絵本を実際の教育現場で活用する方法についてワークショップ形式でアイデアを出し合いました。

初めにまるやま組の萩の氏から、既に行われている教育活動の例として「地域で子供を育てる、三井の子供たちのココロとカラダを育てる」というコンセプト



トで今まで行ってきた環境教育活動、そして科学的・文化的モニタリングの活動などについてお話して頂きました。

続いてジャパン GEMS センター研究員、鴨川氏のファシリテーションで「食べ物で算数」プログラム体験を行いました。これはカリフォルニア大学バークレー校で開発された、自分の頭で考えることと言葉や行動で考えたことを表現する力を身に付けさせることを目的とする、幼稚園から高校生までもを対象とした参加体験型プログラムです。今まで算数は、先生が答えを一つにしていたが、これからは生徒がいろいろな要素を想像し、いろいろな方法を駆使して答えを導き出す方向に進んでいくべきだそうです。



最後に今日の活動を通して、未来の能登、子供たちのために、どのようなものが教育に盛り込まれたらいいだろう？こういうものは盛り込まれたくないな・・・ということを考え

え、班でシェアしました。「一方的な授業は嫌だ！」「子供たちの学びだけでなく地域の学びを生むものを作りたい。」など、たくさんの意見を頂きました。参加された方一人一人に、教育に対するビジョンが生まれただけでなく、ここから新たなつながりが生まれ、能登の GIAHS 教育が広がっていくことを期待しています。

国連大学ブース in MISIA の里山ミュージアム

日時：2019/6/9

場所：石川県森林公園 MISIA の森

石川県津幡町にある石川県森林公園内の MISIA の森で開かれた「MISIA の里山ミュージアム」というイベントに OUIK は今年もブース出展しました。

毎年 5 月 22 日は国連が定めた「国際生物多様性の日」です。今年のテーマは「食」であったこともあり、このイベントでは食と里山のつながり、そして SDGs について発信することになりました。

里山とは人里に隣接し、人が手を入れることで生態系が成り立っている山の事を指します。伐採という行為によって森に光が入り、多様な



動植物が存在する豊かな森になります。さらに、伐採で手に入れた幹や落ち葉などを上手く利用すると、私たちの生活が豊かになります。しかし、近年人手不足や高齢化により森林管理が満足に行えていないことで、生物多

様性が失われている問題があります。「なにもしない、そのままの森よりも、人間がちゃんと手を入れた森の方が実は元気な森なんだよ」ということをシイタケの植菌体験やレクチャーを通じ、子どもたちに理解して頂きました。

「SDGs 三井のごつつお Project」始動

2019年5月、石川県輪島市において地域教育活動などを行うまるやま組が三井小学校と協力し、『SDGs 三井のごつつお Project』という環境教育プロジェクトを始めました。OUIKではこのように「世界農業遺産（GIAHS）能登の里山里海」を利用した持続可能な未来へ向けての教育活動をサポートしています。

「能登の里山里海」と言っても地域によって異なる様々な伝統文化がありますが、三井小学校のような活動が能登の他の地域でも行われ、里海、里山間で交流が生まれるようなプラットフォーム作りを地域の皆様と協力し進めています。

この『SDGs 三井のごつつお Project』は1年にわたり、絵本「ごつつおをつくろう」をベースに「ごつつお（ご馳走）」をつくる過程から地域の自然や伝統、それらのつながりを学ぶことを目的にしています。教室を飛び出し、地域の人たちのお話を聞いたり、友達と協力して「ごつつお（ご馳走）」を作ったりと、自分の頭で考え、実際にやってみるという過程を通じ、クリエイティブな思考や地域を誇りに思う気持ち、そして里山の自然に感謝する心が育まれています。

5月に開催された第1回目の『SDGs 三井のごつつお Project』は輪島市三井のまるやまにて山菜のワラビを収穫し、塩漬け作りしました。山菜採りは初めての生徒が多く、ワラビがどんな場所にどの時期に生えるのか？周りにはどんな生き物や植物が生息しているのか？まるやま組の萩野氏や地域の方々にヒントをもらいながら、視線を低くして一生懸命探しました。余った時間には笹船も作り、「学び」を楽しんでいる様子でした。



第2回目は6月に行われました。この回は高級食材でもある「ゴリ」を探しに輪島市を流れる、河原田川の源流へ向かいました。綺麗な水にしか生息しないゴリですが近年の護岸工事や、田んぼに使用される農薬の影響などにより、ゴリが昔に比べて減ってしまったようです。地元の方にお手本を見せてもらいながら、いざ「ゴリス

き（ゴリを捕ること）」に挑戦です。「つめたーい」と言いながら川に入った子供達もいざやってみると夢中で川に手をつっこみ、30分ほどで10匹のゴリを捕獲しました。今回は実際に「ごつつお（ご馳走）」を作り、食すところまで体験すべく、早速ゴリに串をうっていきます。食事をするということは命をいただくということ。子供達はさっきまで生きていたゴリを見ているのでなんだか複雑な表情です。炭火で焼いたゴリにタレをかけていただきます。「おいしい！」「もっと食べたい！」自分たちで捕った食材の味は格別です。最後は食べなかった小さい個体のゴリを川に返しました。



7月に行われた第3回目は、珠洲市まで足を延ばし、「あごだし」作りを体験しました。「あごだし」とはトビウオの出汁（だし）のこと



で、新鮮なトビウオを煮たり、焼いたりしたものを干して作るものです。珠洲では外浦で捕れる小さなトビウオを地元産の炭火で焼き、干して作っています。

今回の活動は1. あごだし作りを体験 2. あごを焼く珪藻土で作った七輪について学ぶ 3. トビウオを捕まえる道具作りについて学ぶ、という盛況山な内容でした。丸一日かけて珠洲で捕れた魚が地元の人たちの手により、地域で作られた道具や材料を利用して「あごだし」という能登の郷土料理にも欠かせない食材になり、美味しく食される、というサイクルを学びました。また、金沢大学能登学舎にあるSDGsラボも訪問し、持続可能な社会を実現するための17のゴール、169のターゲットについて学びました。自分たちが普段行っている森での活動などもSDGsと関係があることを知り、SDGsを身近なものとして感じてもらえたようです。



シンポジウム「金沢の庭園がつなぐ人と自然」

日時：2019/7/6

場所：金沢 21 世紀美術館 シアター21

国連大学 IAS-OUIK では、金沢の庭園や自然をテーマに、生物文化多様性ブックレット#5『金沢の庭園がつなぐ人と自然-持続可能なコモンズへの挑戦-』を制作しました。

それを記念して、金沢の庭園の知られざる魅力を、歴史、環境、デザインの面から紐解き、庭園の新しい楽しみ方や、「後世に引き継ぐために私たちができることは何か？」を考えるシンポジウムを著者の皆様を登壇者としてお招きし、開催しました。

オープニングでは国連大学のファンパストール・イヴァールス研究員がブックレットの概要について解説しました。



金沢らしい生物多様性の戦略、所有者が庭園を維持していくための苦労や課題、様々な視点から日本庭園がもたらしてくれる教え、日本庭園との新しい関わり方が生み出すものなど、今まで知らなかった庭園の魅力や関わり方を紹介しました。

次に日本民俗学会評議員・元北陸大学教授の小林忠雄氏の基調講演「庭園から見た金沢らしさ」がありました。中国の風水を180度ひっくり返した、いわゆる「逆風水」の空間特徴を備えるのが金沢で、不吉とされる場所に悪霊封じのために寺院群を置いたことを解説されました。また昔の金沢の写真を見ながら中心部には木がいっぱいあり、文字通り「森の都」だったことを示し、古い時代の金沢では周辺の樹木を積極的に入れて造園をしていたのではないかと述べました。金沢には植物に関する民俗も残っていて、植物と生活が一体となったライフスタイルがこの町には今も残っていることは大変注目と述べ、話を締めくくりました。

トークセッション1では、ファシリテーターに鵜隆弘氏（金沢美術工芸大学環境デザイン専攻教授）、パネリストに野々市芳朗氏（株式会社野々市造園 会長）、寺島恭子氏（寺島蔵人邸跡）、長谷川孝徳氏（北陸大学国際コミュニケーション学部教授）、土田義郎氏（金沢工業大学建築学部建築学科教授）を迎え、「金沢の庭園に隠された魅力」をテーマに討論が始まりました。

まずはそれぞれから庭園の魅力、楽しみ方を語っていただくということで、鵜氏からは林鐘庭の五人扶持の松と千田家庭園で毎年学生と一緒にいる清掃活動についての説明がありました。

続いて、長谷川氏からは、加賀藩士の屋敷の庭にはどのような木が植わっていたか？ またその理由などにつ

いて解説がありました。往時のように自給自足ができる庭というのは「これから先、庭園を残していくのに大きな魅力につながっていくのでは」と付け加えました。



寺島氏からは、寺島蔵人邸で暮らしていた頃の思い出を語っていただきました。風呂は庭から拾ってきた薪で沸かし、庭に生えたり、実ったりする自然のものを大切にして食べるなど、慎ましやかな暮らしだったと述べます。また、庭師を入れることができず、見よう見まねで雪吊りも自分たちで行っていたようで、「そういうこともしないといけないことは苦痛でした」と振り返ります。

現役庭師である野々市氏からは、雪国・金沢ならではの剪定方法や、「市中の山居」（里山の情景を家の周りに作る）を基本とした金沢の日本庭園の特徴を解説して頂きました。

土田氏からはサウンドスケープ（音風景）の楽しみ方を紹介していただき、日本の庭園の技術には「暗黙知」として受け継がれているものが多く、未来に引き継ぐためには、作る側だけでなく鑑賞する側も意識して、暗黙知を形式知として残す必要があると述べました。

金沢には多くの庭が残っていて、維持する機会もあって、作る楽しみを知ってらっしゃる方もたくさんいる――。そう言ったものを共有しながら、「風景としてだけでなく、街の自然空間、生物の生息空間としての価値が広がっていけばいいと思う」と鵜氏が述べて、トークセッション1は終了しました。

トークセッション2では「地域の自然から見るサステナビリティ」をテーマにファシリテーター・上野裕介氏（石川県立大学生物資源



環境学部環境学科准教授）、パネリストに円井基史氏（金沢工業大学建築学部建築学科准教授）、アイダ・ママードヴァ氏（金沢大学国際機構特任准教授）と留学生代表（ロシア・カザン連邦大学）、永井三岐子（UNU-IAS OUIK 事務局長）が登壇し、セッション1で知る

ことができた庭園の新たな魅力や価値を、持続可能にしていくために、私たちはどうすれば良いのかを議論しました。

まず、上野氏からサステナビリティ＝持続可能性について考えた時、重要となる行動目標としてSDGsのアウトライン紹介がありました。また自然が持っている機能や仕組みを活用してインフラ整備や防災、国土管理に使っていく「グリーンインフラ」の紹介がありました。

円井氏からは、都市の緑と熱について着目した話がありました。温暖化は都市部ではヒートアイランドによりさらに進んでいるが、都市でも緑地があることで、緑から冷気流が起これ、周辺が冷やされている部分があり、金沢の場合、小立野台地と片町では 夜間、2～3度の気温の違いがあることもわかったそうです。

アイダ氏は、留学生に金沢の文化を体験してもらうプログラムを担当。庭園の中に入るとサウンドスケープ、ランドスケープ、建築、経済を一つの場所から全部見ることができ、茶道などの日本文化を掃除しながら学ぶというベストな体験になっているようです。

永井からは、金沢市と金沢青年会議所、そしてUNU-IAS OUIKが中心となって進めつつあるSDGsの動きを紹介。金沢SDGsの5つの方向性について説明しました。

最後に、上野氏からは、「外国人の視点も入り、様々なものの見方で、新しい価値を発見していくこと。多くの人取り組みたくなるような、そして楽しめるような仕組みを作っていくこと。そして課題解決にはパートナーシップも重要。古い日本らしい、金沢らしい暮らしを守っていく、あるいは取り戻すことができれば、これから50年後、100年後、金沢はもっと魅力的な地域になるのではないかと述べて、トークセッション2は幕を下ろしました。

閉会の挨拶では日本造園学会石川県連絡会の上田哲男氏が庭園の維持管理の難しさについて言及。「所有者や管理者だけでは到底困難な状態にあり、庭園や自然に対する調査研究から維持管理までを視野に入れた、市民協働の取り組みが必要」と述べられました。



GIAHS アクションプラン策定ワークショップ

日時：2019/8/1

場所：志賀町地域交流センター

『GIAH アクションプラン』策定に向けたワークショップが開催され、能登 GIAHS 推進協議会の構成市町、4市5町から関係者が集まりました。

今回のワークショップの目的は3つ。

- ①これまでの GIAHS の取り組みの成果と課題を確認する
- ②能登の里山里海モデルについて共有する
- ③全体や各市町の今後に向けたアクションの方向性をつかむ

午前中は各市町の GIAHS の取り組みについて発表を行いました。共通の課題としては「里山里海の担い手の確保や人材育成」「活動主体への補助金や支援のあり方」などが見えてきました。続いて、OUIKの永井が講演を行いました。（「コレクティブイパクトで拓く能登の里山里海パートナーシップで進めよう！」）

午後には、能登の里山里海の活動主体と GIAHS との関係性を見つめなおすグループワークが行われました。

共通の課題として

- ①支援のあり方
- ②ベストプラクティスからの学びをどう広げていくか
- ③若い人を伝統技術の分野に入れていくには

という3つの課題が見えてきました。

今回のワークショップは、各市町の取り組みの成果と課題を見つめ、また能登全体で GIAHS が包括的、流動的に循環していく為にはど



うしたらいいかを考える機会となりました。グループワークでは最後に自分たちの市町で様々な活動を行う団体や関係者を図を制作することで可視化し、どのような協力体制やサポートを GIAHS の活動を通して行っていくかを検討しました。

LGBT と教育ダイアログ

日時：2019/9/8

場所：金沢 21 世紀美術館 市民ギャラリーA

9月8日に「金沢レインボーウィーク 2019 -SDGs 誰も取り残さない、インクルーシブな金沢を一緒につくろう-」の一環として『LGBT と教育ダイアログ』が21世紀美術館市民ギャラリーにて行われました。会場では LGBT カミングアウト・フォト・プロジェクト「OUT IN

JAPAN」による約 2000 名の写真展示も同時に開催され、その空間の中で行った今回のダイアログイベントは LGBT の理解を深め、地域や学校でできることは何かを考えるよい機会となりました。

モデレーターは OUIK 事務局長の永井が担当し、セッション 1 の「地域でできること」では、馳浩氏（衆議院議員）、萩原扶未子氏（株）ジーアンドエス代表取締役社長、女性起業家交流会 in HOKURIKU 代表）、柴田勝俊氏（石川県小中学校長会 会長）、松中権氏（認定 NPO 法人グッド・エイジング・エールズ 代表）の 4 名にパネリストとしてご登壇いただきました。

「金沢レインボーウィーク 2019」を中心となり運営している松中氏からは「LGBT は身近にいと存在だと気付いてもらえれば」と冒頭に



LGBT の置かれている状況を含めて挨拶がありました。馳氏からは、「LGBT について日本では理解が浅いところがあるが差別解消の法整備というより、理解の増進を主目的とした立法を掲げたい」。萩原氏からは「昔は女性社長に対する差別がひどかった。LGBT についても、いつか当たり前に受け入れられる社会が来るのではないか。その為には多様な関係者を巻き込んで、LGBT の理解の促進をしていく必要がある」。柴田氏からは「子どもの多様性に（どう気づき、寄り添えるかという）対応する教員の多様性が求められる」といった意見を頂きました。「究極的なことを言えば、『僕彼氏いるの』という言葉に『あ、そうなんだ』くらいの反応で会話ができる世の中になってほしい。」と希望を込めて締めくくりました。



セッション 2 「学校でできること」では、前田健志氏（楽しい学校・教員コンサルタント・Second 代表）、松岡成子氏（NPO 法人 ASTA 代表）、鈴木茂義氏（虫めがねの会 代表）、薬師実芳氏（認定 NPO 法人 ReBit 代表）の 4 名にパネリストとしてご登壇頂きました。



前田氏からは「教員をフォローすることも大切。職員室の中で風通しの良いオープンな環境ができれば、学校全体で多様性を認め合う風土ができるのではないか」。松岡氏からは「質問をするときは、「彼氏できた？」ではなく、「恋人できた？」と聞くなど、性の多様性を尊重した発言を心がけることが大切ではないか」。鈴木氏からは「自身がゲイであることを職場でカミングアウトしたとき、そんなプライベートなことを職場で明かさなさいと言われて」「人間誰でも失敗や人に打ち明けにくいことはある。でも、そういったことを打ち明け、受け入れることでお互いを深く知るチャンスになることを授業内で生徒から学んだ」。薬師氏からは「LGBT だと打ち明けられたときの周囲の対応として、もし LGBT の知識がなくてもこれから知っていこうとする姿勢や、対話を通して寄り添っていくことが当事者にとっては励みになる。」とたくさんの体験談を含めながら登壇者の皆さんは語りました。

北陸地方はある調査によると、同性愛者に対し否定的な意見を持つ人の割合が一番高いエリアという結果がでています。



様々な社会的背景があるとはいえ、他者やマイノリティーを理解し、受け入れることは「誰も取り残さない」社会を実現させる上で非常に重要なことです。LGBT という言葉もまだまだ聞きなれない言葉かもしれませんが、今回のレインボーウィークやダイアログイベントに参加された方々は大きく理解が深まったのではないのでしょうか。

「都市の現実と都市の自然」リーディングワークショップ

日時：2019/4/1-4/7

場所：南アフリカ

都市の生物文化多様性に関する本を出版するためのワークショップが南アフリカで開催され、OUIK からはリサーチアソシエイトのファン パストール・イヴァールス

が参加しました。世界中から 13 人の研究者が集まったこのワークショップは南アフリカのロードス大学の教授であるミシェル・コック氏とチャーリー・シャクルトン氏が主催を務めました。

この本の出版にあたり、ファン研究員は日本庭園の姿、そのオントロジー、美学、生態学を金沢の庭園に焦点を当てながら評価しています。さらに日本庭園を通じて人と自然の関係を再構築する方法やそのモデルの提示に力を入れてきました。



ワークショップでは生物文化多様性の概念を広めるためのグローバルなレベルでのコミュニケーションの重要性について論議されると共にそれらを実装するための学術機関を設立することの必要性についても語られました。この本は来年の初め頃に出版される予定です。

第 6 回東アジア農業遺産学会に参加

日時：2019/5/19-22

場所：韓国、ハドン郡

第 6 回東アジア農業遺産学会（ERAHS）が韓国のハドン郡で開催され、日中韓の農業遺産関係者約 300 人が出席し交流を深めました。韓国有数のお茶の産地でもあるハドンでは、急斜面での伝統的なお茶栽培が営まれており世界農業遺産に登録されています。



OUIK は ERAHS の日本事務局を担当し、運営にも参加しています。また分科会「次世代と GIAHS」では、モデレーターを OUIK の Evonne Yiu が務めました。GIAHS



においてもユースの役割はとても大切で、クリエイティブなアイデアが韓国、中国、日本のユース代表から沢山提案されました。

第 4 回 SDGs 国連ハイレベル政治フォーラムに参加

日時：2019/7

場所：国連本部（アメリカ・ニューヨーク）

国連ハイレベル政治フォーラム HLPF では、毎年関係者が全世界から NY の国連本部に集まって SDGs の進捗

を報告します。第 4 回 HLPF は、ゴール 4(教育)、8(働きがいも経済成長も)、10（不平等の解消）、13(気候変動)、16(平和と公正)、17（パートナーシップ）を重点テーマとして 7 月 8 日から 18 日に開催されました。



各国代表の自発的国家レビューに加えて様々な関連イベントが開催される中、注目は、「local2030」という自治体 SDGs のイベントでした。SDGs の 169 あるターゲットの 65% について、自治体が重要な枠割を担うとされ、世界各地から教育、不平等、金融、パートナーシップについて自治体の代表・首長が成果や課題を共有しました。石川県の自治体からも世界に発信が出来る日が来る事を、待ち遠しく思います。

また SDGs の大きな特徴として、「若者の声」を大切にしています。2030 年、持続可能な社会を担っていくのは今の 10,20 代だからでしょう。OUIK では SDGs-SWY というユース団体とともにピーター・トムソン国連事務総長特使（海洋担当）にインタビューし、SDGs ゴール 14（海をの豊かさ守ろう）への次世代への期待を伺うことができました。

新しいスタッフの紹介

浦川 晶子 アドミニストレイティブ・アシスタント



愛知県出身。旅行会社のデスク、子ども英語講師、大学院研究室での事務を経て、2018 年より OUIK の活動に事務補助として携わっています。

夫の転勤等により様々な地域に住み、バックオフィスを中心に業務経験を積んでまいりました。

石川の豊かな自然と、金沢の格調高い文化を肌で感じながら、日々 OUIK の運営をサポートしております。

高木 超 リサーチ・アソシエイト

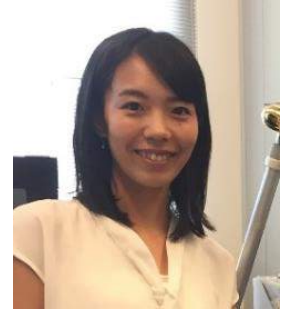
NPO や民間企業を経て、2012 年から神奈川県大和市役所の職員として住民協働、厚木基地問題、待機児童対策を担当。17 年 9 月に退職し、渡米。クレアモント評価センター・ニューヨークの研究生として「自治体における SDGs のローカライズ」に関する研究を行うほか、国連訓練調査研究所 (UNITAR) 等が主催する「SDGs と評価に関するリーダーシップ研修」を日本人で初めて修了しました。帰国後、2019 年 2 月に慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任助教に就任しました (OUIK と併任)。鎌倉市 SDGs 推進アドバイザー、能登 SDGs ラボ連携研究員のほか、ミレニアル世代を中心に SDGs の達成に向けて取り組む団体、SDGs-SWY の共同代表も務めています。OUIK では、主に「自治体での SDGs のローカライズの研究」に従事しています。



想像していた以上の学びを得ることができ、私にとって、今後の核となる部分を形成できた 3 か月でした。

成嶋 里香 (2019 年 6 月～9 月)

大学卒業後、東京で働きながら、NPO や NGO の勉強会を通して、環境や SDGs (持続可能な社会) について関心を持つようになりました。その後、2019 年 3 月に開催された OUIK のシンポジウムの参加がきっかけとなり、インターンに応募しました。



インターンシップに参加するにあたり、①豊かな自然と文化をつなぐ生物文化多様性について学ぶ②石川県内の SDGs の取り組みについて学ぶ③OUIK の活動を学ぶ④イベントやプログラムの運営等に関わるという 4 つの目標を立て、実行することができました。

他にも 3 か月の間に様々なイベントや活動に携わらせていただき、新たな気づきを得ることができました。また、千葉県出身の私にとっては、石川県で生活し日本を代表する伝統工芸や文化に触れることで、日本文化の素晴らしさを学ぶ機会にもなりました。今後は、インターンシップの経験を活かし、持続可能な社会に向けて自分ができることを模索し続けていきたいと思っています。お世話になった地域や関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

インターン生の紹介

向 由佳 石川県立大学生物資源環境学部 環境科学科 4 年 (2019 年 5 月～8 月)

2018 年 10 月から 2019 年 3 月まで ESD としての環境教育の本質を考えるとというテーマでラオスに留学し、そこで得た学びを将来、石川県の環境教育に還元したいと考えました。しかし、石川県の環境教育や SDGs のことをまだ十分に理解していなかったため、インターンシップを OUIK で行わせていただくことで、少しでも理解しようと考えました。

インターン中は三井 SDGs ごっつおプロジェクト、MISIA の森里山ミュージアムでのレクチャー、舩倉島への海ゴミ調査、SDGs カフェや SDGs ミーティングへの参加を通して、環境教育や SDGs の現状だけでなく、行政と実施者が協力して何かを展開していく難しさを学びました。さらに金沢大学里山ゼミでの講演や、飯田高校での SDGs 教育の実施を通して、自身が留学で得た学びを伝え、地域課題を捉えて考えてもらいました。高校生でもきちんと地域課題を把握して考えていることに驚くとともに、大人と子供の思いの間にギャップを感じ、今後自分がどういう役割を石川で果たしていけるのかを考えさせられました。



出版物の紹介

生物文化多様性シリーズ 5 「金沢の庭園がつなぐ人と自然 - 持続可能なコモンズへの挑戦 -」

発行日 2019/7/6

責任編著者 ファン パストール・イヴァールス

発行者 国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

こちらからダウンロードできます。

<http://ouik.unu.edu/en/publication>



2019 年 10 月発行

国連大学サステナビリティ高等研究所 いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

〒920-0962 石川県金沢市広坂 2-1-1

石川県政記念しいのき迎賓館 3 階

Tel: +81-76-224-2266 Fax: +81-76-224-2271

mail: unu-iasouik@unu.edu

URL: www.ouik.unu.edu

